

「漁夫の利」の動物たちはなぜしゃべるのか

— 『戦国策』に見える擬人法 —

高 芝 麻 子

はじめに

「漁夫の利」は現代においても広く使われる故事成語である。また、その由来となる例え話もよく知られている。擬人化された動物たちの会話から成り、「第三者が利益を得る」という状況を的確に表現するその例え話は、現代の我々にも理解しやすい。

一見するとおとぎ話を思わせるようなのかな故事成語であるが、出典の『戦国策』によれば、その例え話が語られたのは緊迫した状況下においてである。戦乱の時代、隣接する燕国を趙国が侵略しようとしている。燕国は趙国に使者を派遣し、強国秦の危険を説いて趙国の王に出兵を断念させようとする。国家の存亡をかけた外交交渉の中で、「漁夫の利」の話は語られているのである。このように深刻な交渉の席上で、国を代表する使者が動物の会話を織り込んだ例え話を語るのには、現在の感覚からすればやや場違いなようにも感じ

られる。では、この話は当時どのように受け止められ、どうして今日まで伝えられるに至ったのであろうか。本論は擬人法という技巧を手がかりとして、一つの見解を示すものである。

なお、本稿で引用する『戦国策』本文は諸祖耿（撰）『戦国策集注彙考』上中下（江蘇古籍出版社、一九八五年）に拠り、他書については注に示した。ただし引用文の句読点や字体などは適宜改めた。

— 「漁夫の利」

この語の出典である『戦国策』とは、戦国時代に書かれ、漢王朝の秘府に所蔵されていた『長書』『国策』『国事』などの書物をもとに、前漢・劉向が編纂した歴史書である。戦国時代は群雄割拠の時代であり、各地に乱立する勢力はいずれも自国を強くし、他国からの侵略を防ぐための、あるいは全土に覇を唱えるための、優れた軍事力と経済力を求めていた。そのために必要なのは統治者を支え、

内政、外交に手腕を發揮する優秀な人材である。統治者の求めに応じるために、才能を持つ人々は国の内外から集い、自身を売り込んだ。統治者に才能を認めさせ、内政、外交の手腕を發揮するためには、政策そのもののみならず、それを伝えるための話術も重要であったことは言うまでもない。

劉向が『戦国策』を編纂したのは、秘府に所蔵された史料の歴史記録としての重要性を重く見たためであるが、『戦国策』に採録された記事の多くは、歴史の流れそのものを論じようとするのではなく、縦横家の弁舌に焦点を当てている。戦国時代、政治家を志す者たちにとっては、弁論能力は必須のものであり、どのような議論が実際に行われ、どのように成功したのかという知識も必要とされていたに違いない。『戦国策』の基づいた『長書』『国策』『国事』などの書物は、そういった需要に応えるものであり、本論で扱う「漁夫の利」もまた弁論の成功例として著録されたものである。では、ここで「漁夫の利」の出典となる故事を見てみよう。

『戦国策』燕策

趙且伐燕。蘇代為燕謂惠王曰「今者臣來、過易水。蚌方出曝、而鷸啄其肉。蚌合而拑其喙。鷸曰『今日不雨、明日不雨、即有死蚌。』蚌亦謂鷸曰『今日不出、明日不出、即有死鷸。』兩者不肯相舍、漁者得而并禽之。今趙且伐燕、燕趙久相支、以弊大衆。臣恐強秦之為漁父也。故願王之熟計之也。」惠王曰「善。」乃止。

書き下し

趙且に燕を伐たんとす。蘇代燕の為に惠王に謂ひて曰く「今者臣來るに、易水を過ぐ。蚌方に出でて曝し、鷸其の肉を啄ばまんとす。蚌は合して其の喙を拑す。鷸曰く『今日雨らず、明日

雨らざれば、即ち死せる蚌有らん」と。蚌も亦た鷸に謂ひて曰く『今日出でず、明日出でざれば、即ち死せる鷸有あらん』と。兩者肯へて相舍てず、漁者得て并せて之を禽らふ。今趙且に燕を伐たんとするも、燕趙久しく相支ふれば、以て大衆を弊れしむ。臣は強秦の漁父と為るを恐るるなり。故に王之之を熟計するを願ふなり」と。惠王曰く「善し」と。乃ち止む。

現代語訳

趙が燕を伐とうとした。蘇代が燕のために趙に赴き、惠王にこう言った。「今、私がここへ来るときに易水を渡りました。ドブガイがちょうど川から上がってひなたぼっこをし、シギがその肉をつつこうとしました。ドブガイは殻を閉ざしてシギのくちばしを挟みました。シギが言います。『今日雨が降らず、明日も雨が降らなければ、死んだドブガイのできあがりだ。』ドブガイもシギに言います。『今日解放してやらず、明日も解放してやらなければ、死んだシギのできあがりだ。』両者はお互いに放そうとはせず、漁師が二匹まとめて捕まえることができました。今、趙は燕を伐とうとしています。燕と趙との戦いが長期戦になれば、人々は疲れ果ててしまいます。私は強国である秦が漁師となることを恐れています。惠王様、どうぞよくよくお考えください。」惠王は「わかった」と言い、出兵を取りやめた。

この故事の中心にあるのは燕と趙という隣接する二国である。記事の厳密な編年は難しいが、『史記』の記述に従えば、蘇代が蘇秦の弟であること、蘇代は蘇秦の死後、燕に仕えたこととされていることから、紀元前三二二年の昭王即位以降のことであろうと考えられる。

先代の王の時代、燕は内乱で疲弊したところに斉の侵略を受けて首都を陥落させられるという辛酸をなめており、その報復のため、昭王の時代には国力の充実に努めていた。昭王は「先づ隗より始めよ」の故事で有名な人物であるが、当時の燕はその郭隗の献策により得られた優秀な人材とともに、各国と連携し斉への包囲網を構築しようとしていた。そこに趙が侵攻してこようとしていたのである。

そこで蘇代が、趙の恵王に謁見を求め、ドブガイとシギの例え話を語って、両国が戦端を開けば利益を得るのは強国の秦であると論じ、侵略を思いとどまらせた。『戦国策』という書物の性質からして、この記録は優れた弁論の実例として伝えられてきたと看做すべきであることはすでに指摘した通りである。ではこの話のどこが、どのように優れていたのでしょうか。以下に検討していきたい。

二 『戦国策』の擬人法

動物や人形など、本来しゃべらない存在が擬人化され、人の言葉を語る物語は、非常に素朴で、子供向け、あるいは牧歌的な印象を与える。しかし、『戦国策』には動物が登場する例え話は多くあるが、その大半において動物は擬人化されていない。「漁夫の利」とほぼ同じ内容を持ちながら、擬人化表現のない話を以下に紹介したい。

『戦国策』斉策

齊欲伐魏。淳于髡謂齊王曰「韓子盧者、天下之壯犬也。東郭逡者、海内之狡兔也。韓子盧逐東郭逡、環山者三、騰山者五、兔極於前、犬廢於後、犬兔俱罷、各死其處。田父見而獲之、無勞勸之苦、而擅其功。今齊魏久相持、以頓其兵、弊其衆。臣恐強秦大楚承其後、有田父之功。」齊王懼、休將士也。

書き下し

齊魏を伐たんと欲す。淳于髡齊王に謂ひて曰く「韓子盧は、天下の壯犬なり。東郭逡は、海内の狡兔なり。韓子盧は東郭逡を逐ひ、山を環ること三たび、山を騰ること五たび、兔は前に極まり、犬は後に廢し、犬兔俱に罷み、各其の處に死す。田父見て之を獲り、勞勸の苦無くして、其の功を擅にす。今齊魏久しく相持し、以て其の兵を頓せしめ、其の衆を弊れしむ。臣は強秦大楚の其の後を承けて、田父の功有るを恐るるなり」と。齊王懼れ、將士を休ましむるなり。

現代語訳

齊は魏を伐とうとしていた。淳于髡が齊王にこう言った。「韓子盧は非常に優れた犬です。東郭逡は非常にすばしい兎です。韓子盧が東郭逡を追いかけて、山の周囲を三周し、山に五回駆け上ったところ、逃げる兎は前方に倒れ、追いかける犬も後方に倒れて、どちらもその場で死んでしまったので、これを見た農夫は、苦労もなく犬と兎を手に入れたのです。今、齊と魏とが持久戦をすれば、兵士や民衆を疲れさせます。そこで強国秦や大国楚が背後を突き、先ほどの農夫のように功績を得るのを、私は恐れているのです。」齊王はそれを聞いて恐れ、將士を休ませた。

齊に仕える淳于髡は、蘇代らとほぼ同時代の人間である。齊が魏に攻め込もうとしたとき、淳于髡は齊王を止めようとした。犬が兎を追い回し力尽きて共倒れになり、農夫が労なくして犬と兎を獲ることとなり、強国の秦や楚が労なくして齊と魏を獲ることになる

と説き、出兵を諦めさせたのである。この話は攻め込む側の齊に居る淳于髡が話者であることから、話者の立ち位置が異なるものの、主旨自体は「漁夫の利」とほぼ同じと言える。だが淳于髡の語った例え話には、擬人法は用いられていない。擬人法を用いなくとも例え話は成立するのである。

そもそも春秋戦国時代の文献には、動物が人の言葉をしゃべるという記載は多くない。『戦国策』においても、動物が直接話法でしゃべるのは、「漁夫の利」と、楚策に見える「虎の威を借る狐」の例え話のみである。『論語』『老子』『孫子』『孟子』『列子』などには例え話であれ、事実の記録であれ、動物の直接話法は見られない。『戦国策』以外で動物の直接話法を用いる文献としては、『莊子』(三例)、『韓非子』(二例)⁴などがある。『韓非子』の例を以下に引く。

『韓非子』「説林」下⁵

三蝨相與訟。一蝨過之、曰「訟者奚説。」三蝨曰「爭肥饒之地。」一蝨曰「若亦不患臘之至而茅之燥耳、若又奚患。」於是乃相与聚噉其母而食之。蝨臞、人乃弗殺。

書き下し

蝨相與に訟ふ。一蝨之を過ぎり、曰く「訟者は奚をか説かんと」と。三蝨曰く「肥饒の地を争ふ」と。一蝨曰く「若亦た臘の至りて茅の燥くを患はんのみなれば、若又た奚をか患はん」と。是に於いて乃ち相與に聚りて其の母を噉みて之を食らふ。蝨臞せて、人乃ち殺さず。

現代語訳

虱がお互いを言い争っていた。一匹の虱が通りすがり、「何を争っているのか」と尋ねた。三匹の虱が「豚の肥えた部分を巡

って争っているのだ」と答えた。一匹の虱は「臘(生け贄を捧げる季節)が来て豚が茅で焼かれることを心配しないのか。他に何を思い煩うというのだ。」と言った。そこで虱たちは揃って集まって豚を噛み、血をすすった。豚は痩せてしまい、人はその豚を生け贄として殺すことはなかった。

口頭での弁論を文章化したと考えられる『戦国策』の記事とは異なり、『韓非子』の記事は恐らく最初から文章として構想されたものであるが、動物を擬人化し、直接話法を用いた例え話を作り、自身の主張を伝えようとしている点は、『戦国策』と同様である。

さてここで、これらの例え話が生まれた時期について考えてみたい。「漁夫の利」が語られたのは恐らく紀元前四世紀後半から三世紀初頭のことである。同じ『戦国策』楚策の「虎の威を借る狐」も正確な編年は難しいが、楚の宣王と江乙との対話の中に見られ、宣王が紀元前三四〇年に没していることから、紀元前四世紀半ばのできごとと考えていいだろう。『莊子』はおおよそ紀元前四世紀後半以降、『韓非子』は紀元前三世紀後半に書かれている。

つまり、筆者の見いだした範囲においては、動物を擬人化し直接話法を用いる例え話は、いずれも紀元前四世紀半ば以前にはさかばれないのである。

三 人事と鬼事

『戦国策』には人形がしゃべる例え話も二例採録されている。

『戦国策』趙策

李兌曰「先生以鬼之言見我則可。若以人之事、兌盡知之矣。」蘇秦對曰「臣固以鬼之言見君。非以人之言也。」李兌見之。蘇秦曰「今

日臣之來也暮。後郭門、藉席無所得、寄宿人田中。傍有叢。夜半、土偶與木偶鬪曰『汝不如我、我乃土也。使我逢疾風淋雨、壞沮、乃復歸土。今汝非木之根、則木之枝耳。汝逢疾風淋雨、漂入漳河、東流至海、汜濫無所止。』臣竊以為木偶勝也。今君殺主父而族之。君之立於天下、危於累卵。君聽臣計則生、不聽臣計則死。」李兌曰「先生就舍、明日復來見兌也。」蘇秦出。

書き下し

李兌曰く「先生鬼の言を以て我を見るは則ち可なり。若し人の事を以てすれば、兌盡く之を知る」と。蘇秦對へて曰く「臣固より鬼の言を以て君に見えん。人の言を以てするに非ざるなり」と。李兌之に見ゆ。蘇秦曰く「今日臣の來るや暮る。郭門に後れ、席を藉かりんとするも得る所無く、人の田中に寄宿す。傍らに叢有り。夜半、土偶と木偶と鬪ひて曰く『汝我に如かず、我は乃ち土なり。我をして疾風淋雨に逢ひ、壞沮せしむるも、乃ち復して土に歸る。今汝木の根に非ずんば、則ち木の枝なるのみ。汝疾風淋雨に逢ひ、漂ひて漳河に入り、東流して海に至れば、汜濫して止まる所無からん』と。臣竊かに以為らく木偶勝るなりと。今君主父を殺して之を族す。君の天下に立つは、累卵より危し。君臣の計を聽けば則ち生き、臣の計を聽かざれば則ち死しせん」と。李兌曰く「先生舍に就け、明日復た來りて兌を見よ」と。蘇秦出づ。

現代語訳

李兌が言った。「蘇秦先生が【鬼】のことを語るために私に会うのならばお会いしましょう。もし人のことを語るつもり

であれば、私は全て知り尽くしています。」蘇秦はこのように答えた。「私はもちろん【鬼】のことを語るためにお目通りするので。人のことを語るためではありません。」李兌は蘇秦に会った。蘇秦は言った。「今日私がここに到着するまでに日が暮れてしまい、外城の門に入ることができず、宿を借りようにも借りられず、誰かの畑に野宿することになりました。その傍らに草むらがあり、夜中に、土人形と木製の人形とが討論をしております。土人形はこのように言いました。『あなたは私には敵わない。私は土でできているのだから、暴風雨に遭って壊れたとしても、土に戻るだけなのだ。しかし今あなたは木の根か枝かに過ぎない。暴風雨に遭えば、水に浮かび漳河に流れ込み、東に流されて海にたどり着けば、漂い続けることになる。』私はひそかに土人形の勝ちだと考えました。さて今あなたは主父を殺し、その一族を皆殺しになさいました。あなた様が天下に臨むのは、卵を積み重ねるよりも危うい状態でございます。あなた様が私の献策に耳を傾ければ無事に生き延びられますが、私の献策を聞かなければ死ぬことになるでしょう。」李兌は「先生、どうぞ宿舎にお泊まりください、明日またお越しいただきたいお話いたしました。」と云った。蘇秦は退出した。

当時の趙では、公子の章が反乱を起こし、敗れて父(先代の趙王、当時は主父と名乗っていた)のもとに逃げ込んだのを、趙の恵文王配下の李兌が包囲し、その結果、公子章、主父ともに死ぬという事件が起こったばかりであった。その事件を受け、蘇秦が趙の李兌に面会を求め、土人形と木製人形との会話に託して、先代の王を死に

追いやった李兌には逃げ場はなく、危うい立場にあることを認識させ、詳しい話を聞く気にさせている。ほぼ同じ内容を持つ話を以下に引く。なお、現代語訳は省略する。

『戦国策』齊策

孟嘗君將入秦、止者千數而弗聽。蘇秦欲止之。孟嘗君曰「人事者、吾已盡知之矣。吾所未聞者、獨鬼事耳。」蘇秦曰「臣之來也、固不敢言人事也。固且以鬼事見君矣。」孟嘗君見之。謂孟嘗君曰「今者臣來、過於淄上。有土偶人與木偶人相與語。木偶人謂土偶人曰『子西岸之土也。挺子以為人。至歲八月、降雨下、淄水至、則子殘矣。』土偶人曰『不然、吾西岸之土也。吾殘則復西岸耳。今子、東國之桃梗也。刻削以為人、降雨下、淄水至、流子而去、則子漂漂者將何處之也。』今秦四塞之國、譬若虎口、而君入之、則臣不知君所出矣。」孟嘗君乃止。

書き下し

孟嘗君將に秦に入らんとし、止むる者千數にして聽かず。蘇秦之を止めんと欲す。孟嘗君曰く「人事は、吾已に盡く之を知る。吾の未だ聞かざる所の者は、獨り鬼事のみ」と。蘇秦曰く「臣の來るや、固より敢へて人事を言はざるなり。固より且に鬼事を以て君に見えんとす」と。孟嘗君之に見ゆ。孟嘗君に謂ひて曰く「今者臣來るに、淄上を過ぐ。土偶人と桃梗と相與に語らふ有り。桃梗土偶人に謂ひて曰く『子西岸の土なり。子を挺して以て人と為す。歳の八月に至り、雨降り下りて、淄水至らば、則ち子殘ならん』と。土偶人曰く『然らず、吾西岸の土なり。吾殘せば則ち西岸に復するのみ。今子、東國の桃梗なり。刻削して以て人と為す、雨降り下り

て、淄水至り、子を流して去らば、則ち子は漂漂たる者にして、將に何所にか之かんとす」と。今秦四塞の國にして、譬ふれば虎口の若し、而れども君之に入らんとすれば、則ち臣君の出づる所を知らず」と。孟嘗君乃ち止む。

齊の孟嘗君が秦に赴こうとし、周囲が止めたが聞く耳を持たなかったところに、蘇秦が赴いて土人形と木製人形の例え話を語って、秦に行けば逃げ場がなくなり危険であることを理解させ、孟嘗君は行くことを断念したという。一見して分かる通り、この二つの記事は非常によく似ている。

① 人事ではなく鬼事を語ることが謁見の条件となる

② 蘇秦が鬼事を語るつもりであると告げて謁見が許される

③ 蘇秦が途上で偶然聞いた人形同士の会話を語る

ほぼ同じ構造を持つ話であることから、もともと一つのできごとが伝わる過程で二つのバリエーションに分かれた可能性もあるが、ここで注目したいのは、蘇秦が語る内容を「鬼之言」「鬼事」と表現していることである。李兌と孟嘗君とはいずれも人事（人間社会のこと）は全て分かっているから「鬼之言」「鬼事」以外聞かないと述べ、蘇秦はもちろん「鬼之言」「鬼事」を語ると応じて対面する機会を得ている。さらには李兌と孟嘗君とは、蘇秦の例え話を聞いて心を動かされており、蘇秦の語った内容は彼らの要求に添ったものだったと言えるだろう。

ではここに見える「鬼」とは何であろうか。「鬼事」という語は『礼記』「檀弓下」の葬儀を論じる箇所⁷に「生事畢而鬼事始已（生事畢はりて鬼事始まるのみ）」とあるように、死者を弔う祭祀をいうこともある。『戦国策』該当箇所についても、『全釈漢文大系 戦国策』で

は「靈魂の世界」、『新釈漢文大系 戦国策』⁽¹⁰⁾では齊策は「幽冥界のこと」、趙策は「鬼神の世界」と訳している。更に『新釈漢文大系』齊策には「死の危険のあることを意味する」との語釈も附されている。しかし蘇秦の例え話やその後の議論には「靈魂」「幽冥界」「鬼神」などは登場しない。また人間世界のこととは知り尽くしているから聞かない、死の危険に関する話であれば聞かなくとも解釈では、死の危険をもたらすものが人事である以上、対としていささか不釣り合いではないだろうか。この「鬼之言」「鬼事」について考える上で注目したいのは『莊子』に見える以下の類似表現である。

『莊子』雜篇「盜跖」⁽¹¹⁾
丘之所以説我者、若告我以鬼事、則我不能知也。若告我以人事者、不過此矣、皆吾所聞知也。

書き下し

丘の我に説く所以の者は、若し我に告ぐるに鬼事を以てすれば、則ち我知る能はざるなり。若し我に告ぐるに人事を以てする者は、此に過ぎず、皆吾の聞知する所なり。

現代語訳

孔丘がもし私に【鬼】の話をするのであれば、私が知らないこともある。もし私に人間社会の話をするのであれば、これ以上のことはなく、私は全て知っている。

これは孔子にこれ以上何も言うなと制する盗跖の言葉である。莊子は蘇秦らとほぼ同時代を生きた人物であるが、雜篇「盜跖」は莊子の執筆ではない可能性が高く、成立時期も明らかではない。しかしそうであっても、時代の近い二書に見いだせる以上、この言い回しは当時慣用的に用いられるものであったと看做してよいのでは

ないだろうか。この言葉は、余程のことではなければ聞くつもりはないという意思を表す表現であり、「鬼事」を語るとは、滅多にありえないことの比喩であろう。

『莊子』では盗跖に制された孔子はそれ以上何も語ることではない。だが、蘇秦は「鬼」のことを語るつもりであると述べて、人形の会話を語り始める。この例え話の内容が「鬼」であり、「鬼」が人の世のこの対であるとすれば、「鬼」とは人の世のことわりを超えた神秘的で不思議なできごとを言うのではないだろうか。蘇秦の語った例え話の神秘性、不思議さは、予言や兆候といった類いではなく、本来語らないはずの人形がものを語り、それを蘇秦が聞いたという点にある。この擬人法を用いた架構こそが「鬼」として李兌や孟嘗君の関心を惹いたのであろう。もちろん不思議なできごとから得た知見であるから、人智を越えた知恵を語るという含みもあつたに違いない。そうであれば、孔子は「怪力乱神を語らず」(『論語』「述而篇」)であるから、盗跖に「鬼事」を語るとはもとよりできないのである。

戦国時代は諸子百家の時代であり、様々な思想家が遊説に回っていた。権力者たちは有能な人材を求めてはいたが、全ての遊説家の話を聞くことはできない。遊説する者たちは、自身の話を聞かせるよう権力者の関心を惹かなければならない。そのためには面白く魅力的な話術が必要であつた。主張を述べるために例え話を用いる遊説家が多いのも、弁論の工夫の一環であろう。だが蘇秦は李兌や孟嘗君に対し、ただ例え話を用いるだけに留まらず、さらに擬人法を取り入れて「鬼」、すなわち神秘的で不思議な話を作り上げ、権力者の気を惹く戦略を採り、成功したのである。

第一章ですで見たと通り、動物がしゃべるといふ表現は、少なくとも管見の限りにおいては紀元前四世紀半ばごろまでしかさかのぼれない。つまり、擬人法を用いた弁論は蘇秦らの時代においてはそれまであまり用いられていない、斬新で画期的な技巧であった可能性が高い。だからこそ無生物である人形に擬人法を用い、言葉をしゃべらせる作り話を「鬼」と称して売り込むことができたのであるうし、そこから自分の主張に繋げていく展開も、権力者の気を惹き、興味を掻き立てるに足るものであったのである。

結び

ここで「漁夫の利」に立ち返ろう。「漁夫の利」の話者とされる蘇代は蘇秦の弟であり、蘇秦が出世したのを見て、学問に努め、蘇秦の死後、その仕事を継いで燕に仕えることとなったと『史記』卷六十九「蘇秦伝」に見える。¹²つまり、『史記』の記述を信じるのであれば、蘇代には蘇秦の弁論技術が引き継がれていても不思議はない。第一章で引いた淳于髡の例からも明白であるように、「漁夫の利」は擬人法や直接話法を用いずとも十分成り立ち得る。しかし蘇代は敢えて動物の直接話法の会話を挟んで、この例え話を語っている。鷸と蚌の会話は内容が挑発的でコミカルであるだけでなく、四字の対句を用い、さらには鷸は蚌の言葉をほぼそのまま使って反撃している。以下に再掲する。

【鷸】今日不雨、明日不雨、即有死蚌

【蚌】今日不雨、明日不雨、即有死鷸

このやりとりは分かりやすいのみならず、リズムミカルで非常にユーモラスである。蘇代はこれを芝居がかった話術で盛り上げて語り、

恵王の興味を引いたのではないだろうか。同様の繰り返し表現などの工夫は、第三章に引いた人形の会話にも見いだすことができる。また、人形の例え話と「漁夫の利」は、「ここに到る途上で偶然見かけた」という体で語り始める点も共通する。擬人法を含むこういった語り口は、縦横家の雄たる蘇秦一派一流の技術であったのではないか。

主張を相手に聞かせるため、相手の興味を惹くためのこれらの工夫は、現代の我々から見れば月並みなものと言える。しかし、戦国時代においては、擬人法を用いた不思議な話は、日々多くの説客に面会を求められ、かつ多くの食客を擁していた権力者たちに対しても十分な魅力を持つ、最先端の弁論技法であり、台詞にもまた聴かせるための工夫が凝らされ、さらに詳しい話を聞きたいと思わせ得るものであった。『戦国策』中で、直接話法を伴う擬人法の例え話を語っている者は、魏の江乙と、蘇秦・蘇代の三人に過ぎず、諸子百家の中でも莊子や韓非子ら一部の思想家に限られている。¹³つまり動物や人形がしゃべる虚構は、決して月並みなもの、子供騙しなどではなく、限られた説客のみが語り得た、斬新かつ有効な弁論技巧と看做されたからこそ、『戦国策』の元史料に採録されたのである。そして、当時最先端の技巧を駆使したプレゼン「漁夫の利」「虎の威を借る狐」は、二千年以上経った現代においても説得力を持ち続け、魅力的な教材として広く読まれ続けているのである。

注

(1) 『史記』卷六十九「蘇秦伝」(中華書局、一九五九年)には「蘇秦之弟曰代、代弟蘇厲。見兄遂、亦皆學。及蘇秦死、代乃求見燕王、欲襲

故事（蘇秦の弟は代と曰ひ、代の弟は蘇厲なり。兄の遂ぐるを見て、亦た皆學ぶ。蘇秦の死するに及びて、代乃ち燕王に見えんことを求め、故事を襲はんと欲す）とある。ただし蘇代が蘇秦の弟であるという『史記』の記載については異論もある。

- (2) 顧觀光は『戦国策』の当該記事を赧王三十一年（紀元前二八四年）に編年しているが、編年については定説を見ない。また、馬王堆出土の『戦国縦横家書』など新史料の発見を受け、近年の研究では、蘇秦らの事跡が『史記』の記載と異なる時系列であった可能性が指摘されている。

- (3) 内篇「逍遙遊」に二例、雑篇「外物」に一例。

- (4) 二例とも「説林」下。

- (5) 金谷治（訳注）『韓非子』第二冊（岩波書店、一九九四年）一五四、一五六頁。

- (6) 蘇秦を蘇代に作るテキスト（南宋鮑彪校注本など）もある。

- (7) 阮元（校刻）『十三經注疏』（影印本、中華書局、一九八〇年）一三三頁。

- (8) 孔穎達の正義には「此一節論葬後當以鬼神事之」とあり、「鬼」字を死者の靈魂「鬼神」と理解している。

- (9) 近藤光男（訳注）『戦国策』上（集英社、（全釈漢文大系）、一九七五年）四六九頁、および『戦国策』中（集英社、（全釈漢文大系）、一九七七年）二九七頁。

- (10) 齊策該当箇所は林秀一（訳注）『戦国策』上（明治書院、一九七七年）四四二頁、趙策該当箇所は『戦国策』中（明治書院、一九八一年）七七九頁。

- (11) 注（1）参照。

- (12) 王先謙（撰）『莊子集解』（中華書局、（新編諸子集成）、一九八七年）二六三、二六四頁。

- (13) ただし、弁論に擬人法を用いるか否かについては、話術の技法以外の要素も関連している。例えば儒家では孔子「不語怪力乱神」（『論語』述而篇）などの主張を受け、非現実的なことを否定する傾向が強く、動物を擬人化する表現は原則として見られない。

（たかしば・あさこ／横浜国立大学准教授）